

タイトル:平成 21(2009)年度 教育セミナー

日時:平成 21 年 9 月 14 日(月)～17 日(木)

場所:東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究 3 階 マルチメディア会議室(304)

鎌田 一洋(國學院大學大学院文学研究科宗教学専攻)

“何しろ、國學院なのである”初日、調布駅に降り立った時漠然と感じていた、門外漢としての不安。だがそんなものはセミナーが始まるとともに何処かに消え失せてしまった。

今回参加させていただいた教育セミナーにおいては実に様々な分野の受講生が集い、また積極的に発表を行った。内容としては建築、大衆文化、抵抗運動、哲学など多岐にわたっており、非常に興味深いものばかりであった。

対し、オールスターのような陣容の先生方がこれを受け止め、厳しくも暖かく、また適確な指導を施して下さいました。また講義においてはその広く深い知識と、最先端の研究を惜しげもなく披露頂いた。加えてその研究分野の発展の経緯や視座なども教えて頂いたが、これは非常に興味深かった。このような経験をすると、やはり学問は一人ではできない、人と人との繋がりが重要なのだと確信する。まさに「教育セミナー」であり、これまでは主に国内の宗教を相手にしてきた自分などにとっては、とてもありがたいものであった。無論、個々の発表や講義を完全に理解できたとは言えないが、新しい視点や発想を得られたのはとても大きな収穫である。なによりも特筆すべきは、受講者発表とセミナーの両方に、議論の時間が十分取られていることであろう。前述の通り様々な分野の研究者がいるため、議論は驚くほど広がる。

さてセミナーは 18 時ほどでお開きとなるが、その後も飲み会の形でこの流れは続く。こちらの飲み会も、正式なセミナーと同じように密度の濃い時間を過ごすことができる。今回参加したメンバーは血がワインに変わっても、議論を重ねていた。その内容についてここでは省くが、断言できる。このセミナーに参加したのなら、尾を踏まば頭までの精神を以って、夜まで参加すべきである。こんな貴重な体験を逃すのは勿体無いのだから。

最後になったが、このような機会を用意して下さった先生方、スタッフの方々、また共にセミナーに参加した受講生の皆様に感謝申し上げるとともに、これからのご研究の発展と皆様の弥栄をお祈りする。

木村 可奈子(東北大学大学院国際文化研究科国際地域文化論専攻イスラム圏研究専攻)

4日間という短い期間ながら、密度が高く、得るものの多いセミナーでした。

学部時代は中国史を勉強しており、中東およびイスラム研究に関しては素人であるため、一度の機会に様々な分野の講演を拝聴できたことは、視野の広がる非常によい機会でした。お名前をかねてより聞き知り、論文を拝読させていただいていた先生から、恥ずかしながら初めてお名前を知った先生まで、多彩な研究者の方々に直にお会いすることができ、大変嬉しかったです。

また、仙台という、中東、イスラム研究を行っている者の少ない地域で勉強をしているため、様々な地域やディシプリンで中東、イスラム研究を行っている同世代の方々と知り合えたことも、大きな刺激となりました。やはり地方では、中東、イスラム研究者自体や、所蔵する史料、講演会、勉強会なども非常に限られているため、積極的に東京に出てくる必要があることを痛感しました。

多くの受講者の発表やそれに対する先生方の鋭い質問や意見を聞かせていただき、己の勉強不足と視野の狭さを感じました。また、学部までは別な専門で勉強をされていた方もさっそく発表しており、まだきちんとしたテーマも決まっていない自分の状況を反省しました。積極的に発表することへの意識の差も感じました。来年は、私も発表側になれるよう、頑張りたいと思います。

地方で勉強する身にとっては、一度に様々な分野を勉強でき、中東、イスラム研究に関する沢山の方々とお会いできるというのは、非常に有り難い機会です。このような機会を設けてくださった、プログラム運営に関われた全ての皆様に、感謝いたします。来年度以降、私のように地方で勉強している人のためにも、末永くこのセミナーが続いていってくれることを心から願っております。

寺本 めぐ美(津田塾大学大学院国際関係学研究科)

「国境を越えた人の移動」への関心から研究を始め、「中東」「イスラーム」に関する専門的な知識が不足している筆者は、議論についていくことができるのかという不安のなかセミナー初日を迎えた。しかし振り返ってみれば、大きな刺激を受け、今後の研究への活力となる有意義な4日間であった。

「中東」「イスラーム」と一口にいっても、受講生や先生方の発表、講義は様々な分野、視点からのものであった。知識不足のために完全に理解したとは到底いえないが、関心を広げる良い機会だった。特に先生方の講義では、研究の視点やフィールドでの経験などが具体的に語られ、セミナーが「教育」を目的にしたものであるのは、筆者のような受講生には大変ありがたいものであった。発表や講義への質疑応答でも学ぶことが多かった。先生方や受講生が、自分自身の関心分野を切り口として、専門外の分野へ質問、コメントするのを見て、その難しさと、重要性を改めて感じた。

また、似た分野に関心を持つ受講生と関心分野についての話をしたり、修士論文執筆への不安や、文献探しの苦勞を共有できたことは励みとなった。さらに、昼食時等には多くの先生方と時間を共有させていただき、留学時代の経験談や、現地の様子を伺えたことも大きな収穫となった。筆者のように、学外の院生、先生方と交流する機会の乏しい院生にとっては、大変貴重な時間であった。

偶然にも、12月の中東イスラーム研究教育プロジェクト主催のシンポジウムに、筆者の関心分野の研究者が、来日、参加される予定との情報もいただいた。また、こちらも中東イスラーム研究教育プロジェクトの企画で、現地の新聞のインターネット版記事の一部を和訳、紹介する「日本語で読む中東メディア」のサイトをお知らせいただくなど、研究を進める上で有益な情報を数多く得られたことも、大変有意義であった。

最後になりましたが、先生方、事務局の皆様、4日間ありがとうございました。

永山 明子(東京外国語大学大学院総合国際学研究所)

今回参加させて頂いた4日間にわたる中東・イスラーム教育セミナーは、受講生も多く、うち7人が発表を行うという充実したものでした。スケジュール上は40分間の受講生による発表と30分間の質疑応答から成っていましたが、多くの発表でその時間内に収まりきれない活発な議論が展開されました。参加者、発表者の数が多いことで多様な地域や分野の発表を拝聴することができ、質疑応答にも厚みが出ていたように思います。

私は今回発表を行いませんでしたが、初日終了後の懇親会や参加者が一堂に会する昼食の席で何人かの受講生や先生方とお話をさせて頂きました。これまで自分の知らなかった他の受講生の方々の専門分野に触れることで「中東・イスラーム」という分野の地域や研究視点の多様性について改めて認識する機会となるとともに、周りの方々から質問を頂くことで自分の専門分野についての知識不足を自覚することもできました。

また、他の受講生の方々と接することで、プレゼンテーションのノウハウや積極的に批評や助言を求め姿勢など、多くのことを学ぶことができました。しかし議論に積極的に加わる重要性を感じると同時にその難しさも痛感し、自分にとっては反省点も多々残る結果となりました。

それぞれの多様な視点から問題関心をもつ先生方や受講生の方々の話を聞くことができた今回のセミナーは、自分自身のディシプリンというものを再認識する良い機会にもなりました。トルコ語という「言語」から中東研究の道に入り、同様にトルコ語というツールを用いてさまざまな研究を行っている友人たちに囲まれていた私には、研究対象は「トルコ」であるという認識はあってもその研究対象を「歴史学の視点で」研究しているのだという認識が欠けていたように思います。これはこのセミナーに参加しなければ気付くことのできなかつた点の1つであり、その中で私にとっては最も重要な点でした。

末筆ながら、研究内容に関するご教授のみならず、学生時代から現在に至るまでの多くの研究の裏話をお話くださった先生方、セミナーの企画・運営を通して手助け頂いたスタッフの方々に深く感謝申し上げます。この4日間の貴重な経験が無駄にしないよう、今後活かしていきたいと思っております。

西園 知宜(早稲田大学大学院社会科学研究所)

東京外国語大学が主催するこの教育セミナーに参加し、多くのものを学べた事は自分にとって、今後イスラーム研究を進めていく上での大きな財産になると思う。学部時代は英米文学というイスラームと全くジャンル異なる勉強をしてきたので、修士一年生になってから始めたイスラーム研究は何よりも増して難しく感じた。特に私が専攻に選んだパレスチナ問題については、どうやって研究を進めていけばいいのか、どこに焦点を絞って研究すればいいのか、自分でも自分がやっている事をよく理解できない状態にあった。そんな中、四日間続いたこのセミナーに通い、学生や先生方の発表を聞いていくうちに自分の視野の狭さや基本知識が不足している事に気付いた。特に、オスマン帝国が崩壊し、中央アジアがソ連の支配下におかれた後のソ連邦政府によるイスラーム女性の解放運動について説明した帯谷先生の「フジュムの頃—ソ連体制下の中央アジア女性解放運動と現代」やこれまでのアメリカにおける中東研究の歴史や流れについて分析した松永先生の「イラン政治の研究に際して思うディシプリンと地域研究のバランス」、またレバノンにおける宗教の多様性と分布について概説した黒木先生の「多様性と他者性のダイナミズム—アラブ・キリスト教徒研究の視角」、ミンダナオ紛争の歴史や現状について説明した床呂先生の「『辺境』ムスリム社会のフィールドワークから—紛争下のフィリピン・ムスリム社会に関する人類学的メモワール」のセミナーを聞いた事がこれまで、パレスチナ問題にばかり注目し、ほかの中東地域にあまり興味を示さなかった自分の研究態度を反省し、今後の研究を進めていくための視野を広げるきっかけとなった。このような貴重な体験ができた事を本当に良かったと思う。しかし、今回のセミナーの唯一の心残りは、自分が発表をしなかった事である。セミナー終了した今となっては、自分も先生方に発表内容について叱ってもらい、アドバイスを頂きたかったという思いでいっぱいです。

能勢 美紀(東京外国語大学大学院総合国際学研究所)

今回、はじめてこのセミナーに参加させていただきましたが、改めて「イスラーム世界」の多様性を感じた四日間であったと思います。

「イスラーム世界」と聞くと、「中東」ばかりが想起されますが、実際にはアフリカから東南アジアまで、一口に「イスラーム世界」といっても様々な地域を内包しており、各地で様々な発展・変化が起きたのだということ、セミナーの中でひしひしと感じました。

特に、自分の研究分野とは違う地域のお話を聞く機会が多く与えられたことは、今後、自らの研究を進めていくうえでも非常に意義の多いことであったと思います。

受講生の研究発表も多岐に富んでおり、中には今まで全く知らなかった地域やその歴史・文化についてのものもありました。それらについて、自分の知識のなさを反省するとともに、先生や他の受講生の方々から発表に対する意見・質問を聞くことで、今まで意識したこともなかった視点や思想にふれることができたのは、自分にとってとてもよい刺激になりました。質疑応答の時間では、本当に小さな質問にまで発表者はじめ、先生方・参加者の皆様が応じてくださり、大変勉強になったと思います。

更に、私にとって、他のセミナーでは得られないと思われる、このセミナーの最も良かった点は、講師の方々の「苦労話」が聞けた、ということです。

他のセミナーや研究会でも、研究の「成果」を聞き、その地域・文化に対する見識を深めることは可能だと思いますが、「成果」に至るまでの努力や苦労、ましてや「学生時代」のそれについて話を聞けることは、まずないと言っていいかと思います。

論文や研究成果を見るだけではわからない、先生方の「生の声」を聞けたことで、私は、大変励まされました。先生方もご自分の研究・進路に対して悩みがあり、それでも努力をし、それを乗り越えてこられたのだということを実感し、改めて自分の研究姿勢を振り返り、先を見つめることができたと思います。

また、このセミナーで、普段接することのない大学や他の分野を研究していらっしゃる受講生の方々と交流を持つことができ、新たな見識を得られただけでなく、とても楽しい時を過ごすことができました。これを機に、今後とも交流を続けていければと思っています。

末筆ながら、セミナーで貴重なお話をしてくださった講師の方々、また運営・準備等を始め、セミナー期間中随所で支えてくださった先生方、運営スタッフのみなさまに改めて感謝申し上げます。どうもありがとうございました。今回のセミナーでの経験を今後活かしていければと思います。

吉田 智賀子(外務省国際情報統括官組織第二国際情報官室専門分析員)

今回は、外務省同室事務官の薦めもあり、09年度AA研「教育セミナー」に参加させていただきました。同事務官の助言通り、中東イスラムを違う角度から考察する良い機会となり、大変有意義な4日間となりました。この場を借りて、今回のセミナーを成功に導いてくださった教授陣の皆さまと、終始お世話いただいた事務局の千葉さんに改めてお礼を申し上げたいと思います。ありがとうございました。

今回同席させていただいた受講生の研究発表内容は、イスラム都市・建築からイスラム思想・哲学に至るまで、多岐に渡る内容で非常に興味深いものでした。今回発表された受講生にとっては「修羅場」であったと思われる質疑応答と教授陣によるフィードバックも、結果として、今後の研究に役立つ貴重な助言・経験となるはずであると感じながら拝聴させていただきました。また、午後に行われたセミナーはもとより、先生方と席を共にする「インフォーマル」な昼食会や懇親会は、教授陣の優秀さ、そして人としての温かさを伺う絶好の機会でした。特に、最終日の打ち上げでは、自分でも気付かぬうちに翌日頬骨が痛むほど終始笑顔だったようです。

修士課程終了後、アカデミックな世界が久しい自分にとって、今回のセミナーで最も学んだ事は、やはり、原点を振り返る重要性です。中東イスラム世界の「今」を分析する実践的知識は、理論的知識が基盤となっているのだと改めて実感しました。今般のセミナーを機に、埃がかぶっていた学術書を本棚の奥から引っ張り出して、再びむさぼり読みだした次第です。

最後に、この度お目にかかれた方々とのつながりを大切に育み、更に中東イスラムに関する所見を広げ豊かにし、今後の成果として示していきたいと思います。来年度から一新するAA研「教育セミナー」がより一層充実し、更に有益な研究会となることを心からお祈りいたします。

※本文は、筆者が所属する外務省、及びその関連団体の公式の立場を反映するものではありません。